

聴覚障害児の早期支援の充実に向けた連携について

—「聴覚障害早期教育公開研修会」の取組を通して—

鎌田 ルリ子

2003～2019年に本校乳幼児教育相談で実施した「聴覚障害早期教育公開研修会」の取組を実施計画書や事後アンケートを基に整理し、新生児聴覚スクリーニングの普及及び小児の人工内耳適応基準の改定という医療制度や科学の進歩との関連を踏まえながら、聴覚障害児の早期支援における本研修会の意義について振り返った。尚、本報告は学校としてではなく筆者による分析と考察である。

キー・ワード：乳幼児教育相談 関係機関との連携 新生児聴覚スクリーニング 人工内耳

1 はじめに

近年、新生児聴覚スクリーニングでの聴覚障害の早期発見が可能になるとともに、人工内耳適応の低年齢化が進んだことから、聴覚障害児の早期支援のより一層の充実が求められる。そのために、保健、医療、福祉、教育、療育機関等が連携して支援を行う必要性が指摘されている。

本校乳幼児教育相談（以下、本校）では、2003年から近隣の保健、医療、福祉、教育関係者との連携を目指し、「聴覚障害早期教育公開研修会」（以下、本研修会）を実施し、2018年度で15回を重ねる（2007年度は実施せず）。そこで、従来の取組を整理し、その意義や果たしてきた役割について振り返り、今後の支援に役立てたい。

2 目的

2003～2018年度に実施した「聴覚障害早期教育公開研修会」の意義や役割を振り返り、今後のよりよい連携について展望する。

3 方法

本研修会の実施計画書、名簿、事後アンケート（15回分）を整理し、以下について振り返る。

- ・全15回の実実施計画書から研修会の趣旨と内容を整理し、新生児聴覚スクリーニングと小児の人工内耳適応基準の動向とを関連させながら概観する。
- ・参加者所属の年次推移を明らかにする。

・事後アンケートを集約し、今後の連携について考察する。

4 結果と考察

(1) 研修会の実際

① 日程

第1回の研修会の日程をfig.1に示した。

日 程	内 容	
10:00～ 11:20	公開保育 報 告	〈乳幼児〉 1歳児グループ・2歳児グループの保育 *0歳児グループはビデオ紹介 〈幼稚部〉 3歳児、4歳児、5歳児の保育
11:30～ 12:10		本校の教育についての概要説明と乳幼児教育相談の現状報告、質疑応答
13:00～ 14:30	講 演	「聴覚障害の早期発見について～新生児聴覚スクリーニングと健診～」 小張総合病院耳鼻科小児難聴外来 森田訓子先生
14:40～ 15:30	情報交換会	情報交換、質疑応答

fig.1 第1回（2003年度）の研修会日程

本研修会の趣旨は、近隣の保健、医療、福祉、教育機関との連携であった。そのため、午前中は乳幼児教育相談だけでなく幼稚部の授業も公開したり、本校の教育について概要説明、現状報告等を行ったりして、聴覚障害幼児の教育の理解を促すようにした。また、「聴覚障害の早期発見について～新生児聴覚スクリーニングと健診～」というテーマで医療機関に講演を行い、新生児聴覚スクリーニングについて関係機関への周知・理解を図った。

2回目以降も基本的な流れは同様であった。

回	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回	
年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
学校概要 活動報告	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
報告 (実践、調査・研究)		● 調査		不明	不明			● 実践	● 実践	● 実践	● 実践	● 実践				● 研究
講演等	●	●	●			●	●		●					●*	●*	
情報交換	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
公開保育	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
質疑応答											●	●	●	●	●	●

fig. 2 研修会の内容

●*：パネルディスカッション

② 内容構成

研修会の内容は、その時々で扱いたいテーマやニーズのある話題を取り上げた。そこで、全15回の内容を「学校概要説明、活動報告」「報告」「講演等」「情報交換」「公開保育」「公開保育に関する質疑応答」の項目で整理し、結果をfig. 2に示した。

「情報交換」と「公開保育」は、すべての回で実施され、「公開保育に関する質疑応答」は、10回目以降に設けられた。

「報告」には、アンケート調査、本校の実践、実践研究の報告が含まれた。

「講演等」には、講演、異業種によるパネルディスカッション、事例を通した話題提供があった。

③ 「報告」と「講演等」のテーマ

「報告」と「講演等」のテーマをTable 1に示した。

・「報告」について

2回目には、新生児聴覚スクリーニングを経た保護者を対象とした調査の結果が報告された。

8回目から12回目は、聴覚障害幼児・保護者への指導・支援を行っている療育機関、教育機関が取組を報告し実践交流を行った。本校の実践報告では、「幼児の聴覚活用」「関りを大事にした遊び」など、それぞれの回で異なるテーマを設けて取組を報告した。

15回目は、新生児スクリーニング検査でreferと

Table 1 「報告」と「講演等」のテーマ一覧

	「報告」	「講演等」
第1回		講演「聴覚障害の早期発見について～新生児聴覚スクリーニングと健診～」
第2回	(調査研究) 新生児聴覚スクリーニングを経た保護者を対象としたアンケート調査の報告及び乳幼児教育相談の内容	講演「聴覚障害の早期発見について～新生児聴覚スクリーニングと健診～」
第3回		講演「新生児聴覚スクリーニングについて」
第4回	(不明)	(不明)
第5回	(不明)	(不明)
第6回		講演「聴覚障害乳幼児の支援を考える」
第7回		講演「きこえに障がいのある乳幼児の支援」
第8回	やまびこルーム、千葉聾学校乳幼児教育相談の報告	話題提供「聴覚活用を考える―事例を通して―」
第9回	けやきルームの実践報告	
第10回	けやきルームの実践報告	
第11回	けやきルームの実践報告「乳幼児の聴覚活用」	
第12回	けやきルームの実践報告「関りを大事にした遊び」	
第13回		パネルディスカッション「人工内耳について」 (パネラー) 耳鼻科医、保護者、乳幼児担当者
第14回		パネルディスカッション「聴覚に障害のある乳幼児への療育について」 (パネラー) 療育関係者、教員
第15回	(実践研究) 乳幼児教育相談における母親の気持ちの変化	

告げられ難聴の診断を受けた子供の保護者が、本校乳幼児教育相談での支援を受ける過程でどのように気持ちが変化したかについてその経過、また、成果と課題が報告された。

・「講演等」について

1回目から3回目は、新生児聴覚スクリーニングに関連した講演を行った。6回目から8回目のテーマが聴覚障害乳幼児への支援であることから、システムから具体的支援そのものに優先課題が移ったと思われる。13回目と14回目は、人工内耳や療育についてパネルディスカッションを開いた。医療・保護者・療育・教育など、各機関の専門性、各職種の役割などを理解し意見交換、情報交換できる関係に高まったと考えられる。

(2) 本研修会の果たしてきた役割について

本研修会の趣旨・内容と新生児聴覚スクリーニング及び人工内耳適応基準の動向との関連を fig. 3 に整理した。

① 新生児聴覚スクリーニングの主な動向

2000年に新生児聴覚スクリーニングモデル事業が予算化された。2005年には聴覚検査事業が全国で展開されるようになり、2年後の2007年には一般財源化された。その後、2012年には母子手帳に記載欄が付記されるなど、発見から診断、そして療育へのシステム化が図られ、新生児聴覚スクリーニングは全国に普及した。2015年に厚生労働省が行った全国実態調査によると財源の確保、意識など地域差が大きいという課題が示された。

② 小児人工内耳適応基準の変遷

我が国において18歳未満の小児に対する人工内耳の適応基準は、1998年に2歳以上とされた。2006年の改訂で適応年齢の下限が2歳から1歳6カ月に下げられるとともに、純音聴力閾値が100dBから90dBに引下げられた。更に、2014年の改定で適応基準は1歳に引き下げられ、両側人工内耳も否定しないとの文言が加わった。

このような適応基準の改定の影響を受け、本校乳幼児教育相談においても人工内耳装用乳幼児の低年齢化は確実に進んだ。

③ 新生児聴覚スクリーニングと小児の人工内耳適応基準の動向との関連からの考察

本研修会の変遷を概観する。

2003年の研修会発足時は、公開保育を通して聴覚障害児教育の理解を深めたり、講演等を企画し新生児聴覚スクリーニングの啓発を行ったりした。新生児聴覚スクリーニングモデル事業が広がりつつあったことから、発見から療育へのフォローアップのシステムづくりを目指して、関係機関と意見交換がなされた。

2009年頃、診断から療育につながるフォローアップ体制の課題や連携の在り方が話題になった。その後は、超早期からの療育の成果や重要性が認識されるようになり、子供とのかかわりや補聴支援、保護者支援などの実践的な話題が増えた。また、人工内耳を装用する乳幼児も増え、人工内耳装用幼児や保護者への支援について情報交換がなされるようになった。

聴覚スクリーニングの主な動向	2000 モデル事業 の予算化	2005 新生児聴覚検査事業実施	2007 新生児聴覚スクリーニング 一般財源化	2012 母子手帳への新生児聴覚 検査結果記載欄付記	2015 厚労省による全国実態調査の実 施 (2016 結果発出)												
人工内耳適応基準	適応基準 2歳以上		適応年齢下限が2歳から1歳6カ月 聴力閾値が100dBから90dBに引下げ				適応年齢下限が1歳に引下げ 両側人工内耳も否定しないとの文言追加										
研 修 会	回数 年度	第1回 2003	第2回 2004	第3回 2005	第4回 2006	第5回 2007	第6回 2008	第7回 2009	第8回 2010	第9回 2011	第10回 2012	第11回 2013	第12回 2014	第13回 2015	第14回 2016	第15回 2017	第16回 2018
	実施要項 に記載さ れている 趣旨等	関係機関とのネットワーク構築 聴覚障害児教育の理解の推進 発見から療育へのフォローアップ システム化 新生児聴覚スクリーニングに関する理解				診断から療育へのフォロー体制構築 聴覚活用、補聴支援				超早期からの療育に関する理解・啓発 遊び かかわり 保護者支援 人工内耳を装用する乳幼児と保護者への支援							

fig. 3 新生児聴覚スクリーニング及び人工内耳適応基準の動向との関連

Table2 新生児聴覚スクリーニングを受けた幼児数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回
	2003	2004	2005	2006	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全乳幼児数	51	64	61	55	53	55	56	60	53	43	35	48	62	71	58
新スクを受けた数	23	37	35	41	38	35	32	36	38	30	27	43	55	61	54
割合(%)	45.1	57.8	54.7	74.5	71.7	63.6	57.1	66	71.7	69.8	77.1	89.6	83.3	85.9	93.1

(年度末時点)

Table3 乳幼児教育相談の人工内耳装用幼児数

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回
	2003	2004	2005	2006	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
全乳幼児数	51	64	61	55	53	55	56	60	53	43	35	48	62	71	58
人工内耳幼児数	0	0	0	0	0	2	4	2	10	8	7	6	7	14	7

(年度末時点)

④ 本校乳幼児教育相談における状況

新生児聴覚スクリーニングを受けた幼児数（年度末時点）を Table 2、人工内耳装用幼児数を Table 3 に示した。

Table2 から、初期の新生児スクリーニングの受診率は45%~70%程度で推移したが、2015年以降80%を超え、2018年に90%台になった。聴覚障害の早期発見・早期療育の充実を願い、全ての新生児への実施を目指した体制づくりを目指しており、受診率は今後更に向上すると思われる。

Table3 を見ると研修会を始めた2003年は、人工内耳の適応基準が2歳以上のため装用幼児はいなかった。年齢下限が1歳6か月に引き下げられた2006年から3年経過した2009年から徐々に増え始めた。

本研修会発足時は、まさに特別支援教育の転換期にあった。多分野・他職種が一堂に会し定期的に情報交換を行い、研修の機会を設けたことは、近隣地域のネットワーク構築の足がかりとして役立ったと考える。

(3) 参加者の年次推移

関係機関毎に参加者の年次推移を示した (fig. 4)。

2015年度以降の教育関係の著しい増加は、参加対象を全国の聴覚特別支援学校に広げたことにある。

全体的な傾向をみると、医療機関の参加者は増加したが、保健機関の参加者は減少傾向にある。

その他の療育機関や保育所・幼稚園の顕著な年次傾向は読み取れない。

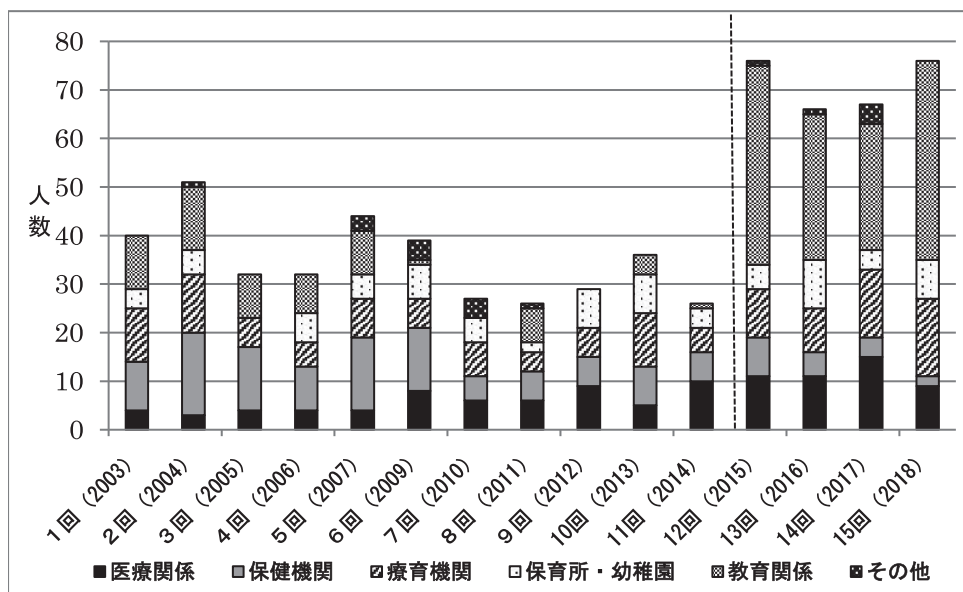


fig. 4 参加者の年次推移

医療機関の参加者内訳を調べたところ、初期は、新生児聴覚スクリーニング検査の精密検査実施機関や近隣の産婦人科の医師、看護師が多く参加しているのに対し、後半は、人工内耳手術及びマッピングに通院している医療機関の関係者が多く参加するなど、変化が見られた。また、医師に加え言語聴覚士の参加も増えるなど職種の広がりとともに継続的な参加も見られるようになった。学校での様子を参観することが医療現場での支援に役立つことが想定され、実際の連携に貢献できていると思われる。

一方、保健機関の減少に関しては、新生児聴覚スクリーニングの普及により医療機関から直接療育機関につながるケースが増え、以前より保健機関を介さないケースが増えたことも原因の一つに考えられる。しかし、検査の未受診の乳幼児、経過観察以降療育につながらなかったケース、家庭への支援ニーズが大きいケースなど、保護者の心理的ケアを含めた丁寧なかかわりが求められるケースも多く、そのようなケースには保健機関が果たす役割は大きい。また、業務の多忙さから研修会の継続的参加が難しく、単発での参加になりやすい状況も否めない。近隣地区における顔の見える連携を構築するためには、今後、保健機関とのつながりを大切にしたい。

新生児聴覚スクリーニングが普及して以降、軽度・中等度難聴や障害を併せ有する乳幼児が早期に発見され、早期療育につながるケースが増えた。そのため、本校乳幼児教育相談と保育所・幼稚園、療育機関に並行して通っている子供たちが増加している。

保育所・幼稚園、療育機関の担当者が、本来の業務を離れ研修会に参加することの難しさも推測されるため、本校のスタッフが相手校を訪問したり、日常の保育を参加してもらったりしてお互いの専門性の理解を深めたい。

(4) 事後アンケートの結果と考察

参加者の事後アンケートの記述を「連携」、「聴覚活用、聴覚口話、コミュニケーション」、「新スク・人工内耳」、「かかわり」、「子どものようす」、「活動内容」、「学校理解」、「その他、全般的な感想」の項目で分類した。本稿では、2回、6回、9回、11回、14回について集計結果をfig 5に示した。

本研修会はその時々でニーズに応じたテーマを設定したため、アンケートに記載された内容から傾向を把握することはできないため、特徴的なことのみ特徴をあげる。

初期（2回目）は、「連携」、「学校理解」、「新スク・

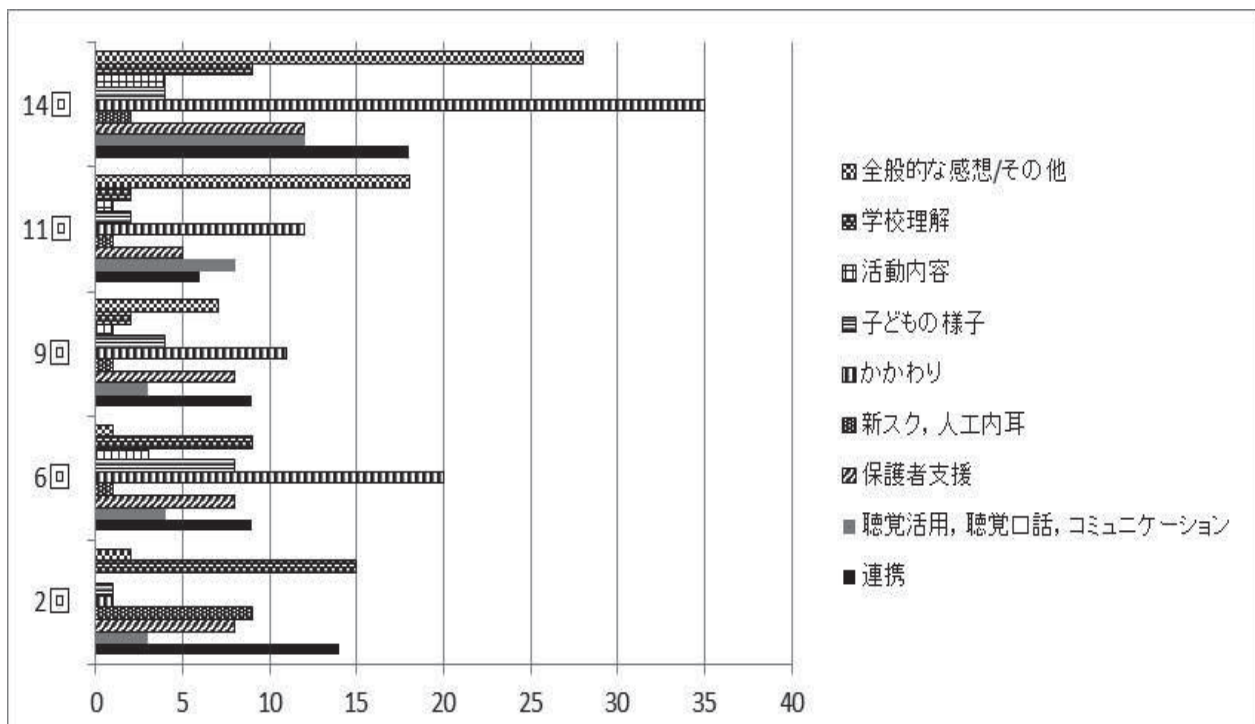


fig. 5 事後アンケートの結果

【2回目】

（連携）・新しい知識が得られ、動向も少しわかったのでとても良い学びとなりました。保健師が求められていることに少しでも応えられるように取り組んでいきたいと思いました。

（連携）・新しい情報をもとに、「保健師中心」ということで、わかりやすく講演いただいて本当に目からうろこの思いでした。

（学校理解）・貴施設の情報があまり周知されていないように思えるので、各保健センターなど健診会場にパンフレット等など設置してはどうかと思います。今回のような研修はとてもよい機会なので継続して実施してもらいたいと思います。

（かかわり）・少人数で、ひとりひとりにじっくりと時間をかけ丁寧に関わっておられるところに感心しました。まさに先生と子ども達が『膝をつきあわせて』いる姿が印象的でした。子ども達の笑顔と、それをほほえましく、かつ心配そうに見守っている母親のあたたかいまなざしが忘れられません。

【6回目】

・（連携）医療関係から直接教育機関につながるケースが多く、地域の保健師として関わるのが少ない。その結果、知識・情報も少なく、相談先としては力不足となっている。スクリーニング判定が出るまで長く不安な時、どんな支援ができるのだろう。

・（連携）初めて聾学校の見学にきました。実際の教育現場での工夫や苦労が伺えてとても参考になりました。どうしても医療現場と教育現場との考え方の違いというものがあると思います。根底に流れている部分は一緒であり、今後、もっとお互いが近寄れるとよいと思います。

・（かかわり）レベルの高い保育であり感心しました。根気強い関わりや言葉での表現は、健常児でも使えると思います。個々の関わりを大切にしている内容で、感動しました。母への支援という姿勢がすごいと思います。今の時代、子育てをする母への支援は重要だと痛感しています。

【9回目】

・（連携）医療、施設、病院に勤務していると、教育の現場に行く機会というのはほとんどありません。学校の先生方から耳鼻科医の私達にわざわざ案内をいただいて講義などをきかせていただくチャンスというのも意識して参加しようと思っていなと、これまた全くないので、大変貴重だと思います。

・（活動内容）0～3才児の指導場面に接することがなかったため大変勉強になりました。いつも個別指導でしかお子さんと接しないため、グループで行うとこんなにも豊かに様々な予期しないコミュニケーションを経験、体験できるんだと感じました。

【11回目】

・（かかわり）聴覚に障害のある方の教育がどのように行われているのかイメージが出来ていなかったため、実際に保育をみる事が出来て、声のかけ方や保護者への関わり方のアドバイスの仕方など勉強になりました！

・（かかわり）保健指導の場で母子の関わり方や声、言葉の成長を促すためにどんな声かけをするとよいかなど学ぶことができよかったです。

・教員の方々の実際の関わりの様子を拝見し参考になりました。非言語性のコミュニケーションの取り入れ方、使い方が多く使われており、子ども達が楽しく参加している姿が印象的でした。

【14回】

・（かかわり）グループ活動の様子をビデオで観せてもらいました。療育の仕方も基本、保育とあまり変わらないように感じました。子ども達の楽しい顔も、先生方が一緒に楽しいと思う気持ちで接している、お互いに共感しているのがよく伝わってきました。

・（かかわり）聴覚障害を持ちながら生活する児の年齢ごとの発達を見ることができ、とても参考になりました。年長さんの頃にはほとんど通常どおり、先生やお友だちとのやりとりができており、それは0才からの早期支援によるものなのだと感じました。通常の一一般的な関わりに+αで聞こえづらい中でのコミュニケーション方法を育てていく支援が丁寧だと思いました。

・（感想）全国のろう学校、医療、福祉機関の方と一緒に会い、情報交換する機会は一地方都市ではむずかしいことであり、今回得られた情報、意見はとても有意義な内容でした。

人工内耳」が多く、会の趣旨がアンケートにも反映されていた。6回目以降は、いずれも「かかわり」に関するコメントが多かった。具体的には、所属機関や職種を問わず、丁寧なかかわり・当たり前のかかわりの重要性、また、音声によるかかわりの可能性について共感する感想が多く寄せられた。

全体に共通しているコメントを左に取り上げた。

5 おわりに

2019年、「難聴児の早期支援に向けた保健・医療・福祉・教育の連携プロジェクト」（厚生労働省、文部科学省）が発足し、6月には課題と対応について報告がなされた。その中で、難聴児の早期支援の充実が示され、今後、更に各機関の垣根を越えた支援の充実が求められるとともに、相談や療育の中核施設として聴覚特別支援学校の担う役割が示された。「子どもへのかかわり」、「保護者支援」など、教育機関からの具体的情報提供は、支援の中身の充実にとって役立つ情報だと考える。

【付記】本報告は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の審査を受けて承認を得た。